

桂坂の歴史と「自然」



南本通り 並木の初夏 山の手倶楽部 野田照代氏

桂坂の歴史と「自然」



歴史を刻む大枝・桂坂の地

桂坂の北に控える山なみの描く稜線を、^{からとこえ}唐櫃越の間道が走っています。この唐櫃越の道は、京の都からは桂川を渡り、川島、檜原、塚原、沓掛を経て老ノ坂越えに丹波に抜ける山陰街道の、いわばバイパス路で、とりわけ都を戦乱に巻き込んだ南北朝の内乱期、この間道は、京に侵攻し、あるいは敗退する武士団の足跡を記す、いわれのある道です。現在は松尾の山田地域から松尾山の北面をのぼり、尾根づたいに沓掛山、天蓋峠を通過して亀岡市の篠町王子に至るハイキングコースになっています。

桂坂の町名

この松尾山を背にして南の方を望むと、左に向日丘陵、右に西山連峰、その間に洛西ニュータウン、向日市、長岡京市の街なみが続いています。この桂坂は、山林を切り拓いてつくられた、海拔150m前後の街です。南に位置する大枝学区や洛西ニュータウンを含むこの地域は古い歴史にその名を留めていますから、桂坂の町名や公園の一部にも当然、この地が歴史を刻んでいることを窺わせる名がつけられています。

桂坂には、大字に当たるものに、「大枝」と「御陵」の二つがあります。

「大枝」を冠する町名には、桂坂では北沓掛町1丁目から7丁目までの各町。大枝学区には沓掛町、塚原町、中山町、洛西ニュータウンには、東長町、西長町、東新林町、西新林町、南福西町、北福西町があります。「北沓掛町」は「沓掛町」の北に位置

することから命名されたものです。

また「御陵」のつく町名には、桂坂学区では大枝山町1丁目から6丁目までと峰ヶ堂1丁目から3丁目までがあり、御陵細谷町一帯は「京都大学桂」に町名変更されました。国道9号線沿いにも「御陵」の付く北山町、谷町、荒木町などがあります。

「大枝（大江）」の古墳群

「大枝」は古から史書などに記された地名です。ロータリーの北側に在る、すり鉢状の大きな森、これは「古墳公園」の通り名で親しまれているところです。桂坂のまちが出来る時、マスタープランに則ってこの地を「古墳公園」として整備して残すことになり、数多の円墳のうちの一基が東南の隅に移設されました。



写真は、桂坂が大規模団地として造成されつつあり、まだ「古墳の森」も公園として姿を現す前、1980年頃の貴重なもので、150m程の高みから北西方向に向けたカメラは、後方の松尾山、手前の古墳群を擁する森と一つの円墳、そして左手の下狩川^{しもかりがわ}の

姿などをとらえています。

また、図面は「古墳公園」として整備された姿です。赤松の中に点在する○印は13基の古墳で、東南隅の、○で囲むものは移設された古墳。園内には写真のとおり下狩川が流れています。しかし今は「古墳の森」の「森」にふさわしくというべきか、自然の復原力のしたたかさにすっかり委ねられたままで再び整備の手を待つ状態です。



ところで、この「森」に在る群集墳は「大枝山古墳群」と呼ばれ、古墳時代後期（6～7世紀前半）に築造されたものです。大枝小学校の東側を流れ小畑川に注ぐ下狩川沿いに谷を北に遡ると、「古墳の森」に行き着くのですが、ここに在った20基以上の円墳には横穴式石室があり、須恵器や土師器、朝鮮製の金環などが数多く出土したことから、新羅からの渡来人・秦氏一族の墓であるといわれています。近くにある「塚原」の地名が示すように、大枝の地は秦一族の勢力圏に在って、「塚」のあるところ、すなわち一族の墓所でした。

歌に詠まれた「大江山」

「大江山」は、歌枕の一つとして、近くの「小塩山」とともに古来、歌よみによって好んで詠みこまれる地名でした。

『金葉集』巻9に和泉式部の女・小式部内侍の有名な歌が収められています。

大江山生野の道の遠ければ
ふみもまだみず天の橋立

これは、歌の才能を妬み、母式部の代作だろうと戯れている人に対して「大江山を越えて行く、丹波・生野（福知山市）への道は遠いので、母式部のいる丹後の天の橋立には足を踏み入れたこともなく、母からの文もまだ見ておりません」とやり返した歌で、山城の国と丹波との境「大江山」の遙か先に在る、母のいる「天の橋立」を想い遣った歌です。

「大江山」は古くは『万葉集』にも詠まれている名のある地名で、『新古今集』にはまた僧・慈円が「月前聞雁」の題で詠んだ、次のような歌も撰ばれています。

大江山かたぶく月の影さえて
鳥羽田の面に落つる雁がね

この歌は、慈円が「大江山」と「鳥羽」という二つの歌枕の力を借りて大江山の西に沈む、冴えわたる月の光と鳥羽の田に舞い降りる雁の、二つの景物を美しく、絵画風に描写したものです。

国境に在る「大江山」

このように歌枕として有名な「大江山」は丹波国との国境に在り、「〈従是東山城国〉（是より東 山城国）」と書かれた国境を表す石柱が首塚の手前に今も残っている、そのような都から遠くはなれ、丹波国という外の世界の入口であった老ノ坂は、当時都の人々から不気味な場所と思われていた。老ノ坂峠と山陰道が通る大枝山は、私たちに多くの歴史を語ってくれている——桂坂小学校の「本とお話クラブ」が高学年用に作成した教材『歴史探訪——わがまち大枝』の記すところですが、「大江山・老ノ坂」の向うは「異界」と考えられていました。

「境（堺）」は、この峠に限らず、他を隔てて異界からの邪鬼悪霊の侵入を防ぐ重要な場所と見なされます。山城の国の「四堺」の一つであった、この老ノ坂では770年に災厄の京への侵入を防ぐために「四堺祭」が執り行われています。

「大江山」に棲み「邪鬼悪霊」と見なされた盗賊が夜な夜な出没しては京の平安を脅かすということで、朝廷の命を受けた源頼光が渡辺綱、坂田金時らの四天王を率いて大江山に向かい、酒吞童子を退治したという話はよく知られていることです。

「大枝（大江）」という地名に関して僅かの例を挙げたに過ぎませんが、桂坂を含むこの地は「私たちに多くの歴史を語ってくれています。

かなり広く用いられている「御陵」という地名もまた由緒があり、これは、9号線沿いに整備されている「天皇の杜古墳」に拠るもののようです。

「沓掛」という名

「沓掛」の由来についても、前掲の『歴史探訪』の中で次のように説明されています。

東と西を向日丘陵と西山連峰にはさまれた大枝の地は、北に松尾の家並みをひかえ、南にひらけ、陽当りもよく、緑に恵まれ、古くから格好の棲息地とされていたようだ。それで、山陰道がつくられてからは、宿場として栄えた。山陰地方から都へ上がる場合、ここでひと休みして旅のほこりを落とし、身支度をととのえ都へ入ったそうだ。山陰道を下るにもこの宿で一息入れ、わらじのひもをしめ直して旅だったとのこと。

大枝には、沓掛の名が残っている。これは、その名のとおり〈沓・くつ〉=はきものを〈掛ける〉場所の意で、旅籠や茶店が軒を連ねていたといわれている。そのにぎわいも明治の中頃まで続いたが、鉄道山陰線の開通とともに次第にさびれていった。

（「宿場町 沓掛」の項）

「山陰道」と「唐櫃越」

歴史教材中に見える「山陰道」は、古く天武天皇の時代には設けられており、「大江の関」も『日本書紀』の一本に、白鳳8（679）年11月「初めて関を龍田山、大江山に置く」とあります。「沓掛」は、『歴史探訪』が記すように、京のまちから「大江の関」、老ノ坂を経て丹波に抜ける山陰道の交通の要衝でした。

註：「大江の関」は、大枝沓掛町の、「光仁天皇皇后陵参道」と記す石柱の立つところから少し西に行った右手の高みに小さな祠があり、その付近といわれています。

この「皇后」とは桓武天皇の母・高野新笠のことです。

しかし、「大江の関」を避ける、あるいは密かに京のまちに向かう必要も時にはあります。その道が

問道の「唐櫃越」です。天蓋峠（426m）と「峯ヶ堂」辺りとの高低差は約200m、しかも隘路ですからとても交易の往来には向きません。では、「唐櫃越」はどのような道として利用されたのか、ここでも桂坂小学校の『歴史探訪』などをもとに記してみます。

旧山陰街道の北に、民家と見まがう造りの地福寺がある。旧山陰街道の北に、民家と見まがう造りの地福寺がある。天林山と号し、本尊は身の丈80cmの阿弥陀如来像。一木彫りで、藤原期のものと言われ、もとは桂坂の東北、唐櫃越えの山中法華山寺（俗に峯ヶ堂）にあったものがここに移されたと伝えられている。

元弘3（1333）年、後醍醐天皇方の千種忠顕が軍勢を集め丹波の篠村から老ノ坂を越えて西山の法華山寺に着陣し（唐櫃越えという説もある）京都の六波羅探題を攻めたが、あえなく敗れ、西山の陣を撤退、六波羅探題方は翌日に法華山寺（峯ヶ堂）をはじめ松尾にかけての仏寺神殿を破壊、僧坊や民家を没収、財宝類すべてを運び去ってから、あたりの民家に火を放ち、このあたりが一瞬にして焼けおち、仏像・神体・経典がたちまちのうちに消えてしまった。残ったわずかな仏像を地域の人々が桂、川岡、大枝等に運び出したといわれており、地福寺の阿弥陀如来像も、そのうちのひとつだと伝えられている。



もし今日までこれらのお寺が残っていれば、桂坂の東北から松尾にかけての西山は、高野山や比叡山と同じくらいの霊場となり、名勝地になっていたことであろうといわれている。（「地福寺と峯ヶ堂炎上」）

註：「六波羅探題」は東山区五条上る、鴨川左岸の六波羅密寺の南に在った。

法華山寺「峯ヶ堂」

千種忠顕が「西山ノ峯堂」に布陣し六波羅を攻めた、上の史実は『太平記』に見えるものです。少し後の『明徳記』は「明徳の乱」の顛末を伝えるもので、『平家物語』や『太平記』とともに戦記文学の1つに数えられますが、史実は琵琶法師ではなく、物語僧によって語られました。

三代将軍・足利義満の頃のことです。山陰地方で勢力を誇示していた山名一族の山名陸奥守氏清と播磨守満幸は明德2（1391）年12月に反乱を起こし、わずか一日にして潰えさるのですが、ここでそのうちの、「峯ヶ堂」に関わるくだりを記してみます。

さる程に（山名）播磨守（満幸）廿六日暮れ程に丹波の篠村に着きて合戦の評定有りけるに大葦治郎左衛門宗信 進んで申しけるは、「この勢当国に着きたる事は定めて京都へも聞こえぬらん。しからば敵 桂川を越して老の峠に馳せあがって相支へ候はば、ゆゆしき大事にて山も越し候ふべし。然らば国境の勝負に成って都へ入らん事は不定なり。只今夜山を越して峯の堂に陣をめぐされて、京勢のはたらきを目の下に見下ろして、八幡の御勢と撤し合せて御合戦有るべきか」と申したりければ、「この儀余儀なし」とて、廿六日の宵より老（の）山を打ち越して、満幸の兵千七百余騎 峯の堂に陣をとり三つ引両の旗三旒 桂川の河風、松尾山の嵐に吹きなびかせて控へつつ雲龍天に横たはれり。内野（註：官衛の荒廢に伴い無人の野と化したところ）の御陣と峯の堂と三里に足らぬ間なれば、互に敵を目にかけて両陣ともにゆらへたり。

（「山名満幸方の軍評定」）

満幸の軍勢は12月29日、「峯ヶ堂」を下りて「内野」を攻めますが、陰暦29日は晦日で月はなく、全くの闇夜。予めの評議に遅れた満幸は、「其の故は夜半ばかりに陣を發って、木の葉を分くる山路の幽なる跡を尋ねつつ馬に任せてうつ程に、東の谷へおると思ひたれば、南へ向けて打ち行く。川島辺を打ち過ぎて、丹波口へ出でたれば、夜はほのぼのと明けにけり」と言い訳をします。実はこの時、夜陰に乗じた敵方の「緋緘の鎧着て葦毛なる馬に乗りたる武者」に謀られ、行く方向を大きく逸れてしまつて味方との合流が叶わず、一日にして戦に敗れることになりました。

陰暦の月末であれば、真つ暗闇。たまたまこの時は地の利を活かした作戦を進めることができませんでしたが、唐櫃越沿いの山間に位置し、京を眼下に見下ろせる「峯ヶ堂」は陣を布くにはもってこいの場所だったがために、しばしば戦乱に捲き込まれております。法華山寺・峯ヶ堂焼失も応仁の乱の間の出来事でした。

「峯ヶ堂」（傍には「峯ヶ城」も）は、桂坂から松尾へ下りる東海自然歩道と、その北西を通る唐櫃越の道に挟まれた山の斜面に在り、現在の峰が



堂1丁目・2丁目の山際の辺りが一部その領域に含まれていたようです（現在は京都大学の用地）

桂坂の「自然」とまちづくり

かつての大枝の山村風景

夏は水のあるところ、夜はおびただしい螢が灯りを点して飛んでいた。子ども連は、ある時は団扇を持ち、ある時は菜種の穂殻を竹の先にゆわえて、宇婆多（小畑）川畔で、狩子（下狩）川の石橋のたもとの宵闇に、螢を取ることに夢中であった。夕方、釣針に蚯蚓をさした10本20本の流し釣を、宇婆多川や谷川や、狩子川や蟹川の深い處に流しておき、暁方、弟の徳松と二人で揚げに行った。ごりもつ（大きなゴリ）や、うぐいや、ままには細い鰻がかかっていようものなら、声を上げて喜んだものだ。

…

1973.10.16 記

これは、大枝村中山出身の桂定治郎氏が、大枝小学校百周年記念誌『大枝の郷』に「少年の頃の大枝村」と題して寄せられた文章の一節です。小畑川では今も群れをつくって泳ぐ魚の姿が見られます。また、桂坂では、野鳥遊園内の人工池に注ぐせせらぎで、今や夏の風物詩ともなった、乱舞する螢を観賞することができます。

桂坂を流れる「川」

桂氏に「谷川のその源を求めゆけば菌朶の生ひたる岩間なりけり」という歌があります。

桂坂を貫流する「谷川」に、西から順に沓掛川、古世谷川、下狩川、西尾（二升）川があり、いずれも小畑川に注ぎます。松尾山南面の山裾に「谷川のその源を求め」ていくと、小さな砂防ダムに出くわし、さらにその堰を越えようと、ようやく、文字どおり「觴を濫べられる」ほどの細い水も風の架けた紅葉の「しがらみ」にしばし流れを止められ、ところどころ伏流となりながらも音



もなく流れています。

沓掛川は療護園の東に、古世谷川は山の辺の公園から西に30m程のところに、下狩川は野鳥遊園の西側の谷と池に注ぐ谷筋にそれぞれ「濫觴」があり、東の西尾川は、いま峰ヶ堂地域が宅地化されて山容すっかり変じていますが、源はその辺りにあったはずです。

かつては、こうした「細い流れ」がそこここに湧き出る谷水を集めて次第に流れを大きくし、小畑川に注いで行ったのですが、今は、源を発してすぐのところ桂坂という大きな構造物によって一旦、遮断され、その間は本来の流れを失います。

桂坂の「谷川」はいづれも、街なかを巡る際には側壁も川底もコンクリート造の「人工河川」に姿を変えてることになります。川底には水の滞留するところも、魚の棲みつける「洞ろ」もなく、雨の時以外はほとんど水も流れませんから、「ごりもつ」など水棲動物の棲息する環境とはとてもいえませんし、また私たちにしても、耳を澄まして静けさに浸れるせせらぎの音も、ちょっと足を留めて水面を眺め心癒せるような水辺もありません。ただ、春と秋のプラザを流れる小川と、野鳥遊園の前からロータリーにかけての川の造りだけは、川底、側壁ともに自然石の切石でできていてそれなりの趣もあり、流れも適当な間隔で設けられた段差によって調節され、急勾配を流れ下るよう配慮されているようですが、やはりここにも、魚の姿も水の浄化に役立つ水草も見られません。桂坂に「せせらぎ」らしき水辺を求めるとすれば、野鳥遊園の池から流れ出る、遊園の門を潜って右側に在る「流れ」ぐらいでしょうか。



近代都市に相応の街路空間の美、安全性や機能性を求めるせいですが、雨水は側溝を経て「谷川」にそのまま流れ込む仕組みになっていますから、普段はほとんど流れる水を見ることはできず、水に親しむ水辺も設えてはありません。谷川の「復元」とは程遠いようです。(序でにいえば、この桂坂を巡る「谷川」の呼び名は、川に架かる橋の欄干に、川の名ならば、例えば「古世谷川」のように、また、橋の番号ならば下流から順に「こせたに5ごうばし」のように名を記すプレート(黒地に白抜き文字)がとりつけられており確認できます)



起伏に満ちた桂坂

4つの「谷川」が桂坂地域から流れ出る下の方にはいづれも団地開発時に造られた「沈砂池」がありそこから下流の川底は本来の姿に戻ります。とはいえ、かつて桂氏ら子ども連の心をとらえ、川遊びに夢中にさせた下狩川ではなく、今は水量も乏しく、魚の棲める深みもなく、昔日の面影はありません。

こうしてみると桂坂は、上流に設けられた「砂防ダム」と、下の「沈砂池」との間に造成された人工の台地、大きな「構造物」の上に乗った「まち」といえそうです。



4つの谷を1つの台地として平坦化するには谷を削り、谷を埋める必要が生じます。

現在の桂坂は、等高線から推定すると、ロータリーの地点は海拔約130m。ここをすり鉢の底と見た場合、野鳥遊園辺りの三角点が176.7m、西念寺近くの交差点が170m、峰ヶ堂1丁目のバス停辺りで推定約160mですから、桂坂「台地」の高低差はかなりあることとなります。因みに、元コミュニティセンターの辺りは110m。



では、このような地形の山間の地をきり拓き、大規模な造成工事を経て「まち」に変容させる、つまり「やり直しのきかない構造物」として仕立てるには一体、いかなる理念のもとで、また、「目に見えない、地下の部分」の造成に際しては、いかに「細心の注意が払われ、綿密な工事が施され」たのか、私たちには気になるところです。

この点については西洋環境開発の発行した『るりびたき』（1999.8.25）の中で次のように説明されています。（関連⇒「住みよい街〈桂坂〉」46頁）

桂坂の開発と造成

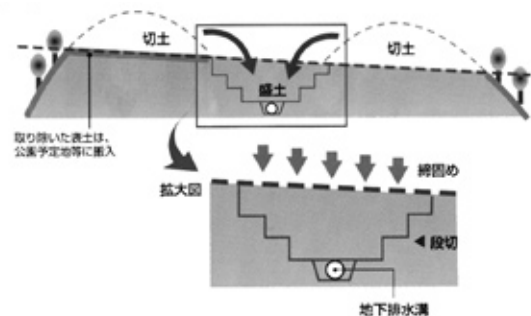
「人と自然との共生」、これが桂坂開発の基本にある考え方です。これを敷衍する桂坂のマスタープランは、生活空間として安全性、快適性、機能性を十分に備え、かつ、周囲の自然や環境とも調和させるべく、幅広い角度から作成されました。

「自然との共生」とはいつても、「開発と自然破壊は表裏一体の関係」にあることから、この造成した人工台地にいかにして「自然を復元」させるかという、難題を抱えることとなります。

そこで、「まちづくり委員会」の設置はもちろんのこと、「自然形成委員会」「バードサンクチュアリ形成委員会」「古墳公園計画委員会」の、併せて4つの分科会が設置され、構成メンバーとして都市計

画、土木、建築、生態学など多くの分野の専門家が参画、検討が進められただけでなく、「将来の住民の立場」からも検討が加えられました。緩い傾斜の山間の地を造成して出来あがる桂坂は「やり直しのきかない構造物」ですから、「目に見えない地下の部分」に対しても「細心の注意」が払われ、「綿密な工事」が施されていきます。

その後、下狩川や古世谷川など上流地域は、南下がりの地形を考慮に入れながら、丘の部分を削り取り、その土で谷を埋めるという工法で造成されていますが、この切土・盛土工事は、湧水の処理とともに宅地造成の根幹となるものです。桂坂では、地盤沈下を防ぐために「段切工」が施されたうえ、最深部には集水管を埋めた「透水施設」が設けられました（図面）。これは、湧水が地下に滞留することなく宅地外部に排水される仕組みです。造成工事には、また、どうしても土砂や濁水の流出を伴います。沈砂池や調整池を設けることによって下流域に被害の及ぶことを防ぐ配慮もなされました。



この「段切工」によって「盛土が馴染みやすくなり、すべりも防止」できるそうですが、切土・盛土工事の際にはさらに「設計上の土性質（単位体積重量、粘着力など）が確保されるよう、十分な締め固め」が行われます。これは「空気の隙間が少なく、密な構造になっている土ほど透水性は低下し、水の浸入による強度低下を招きにくく」するためです。

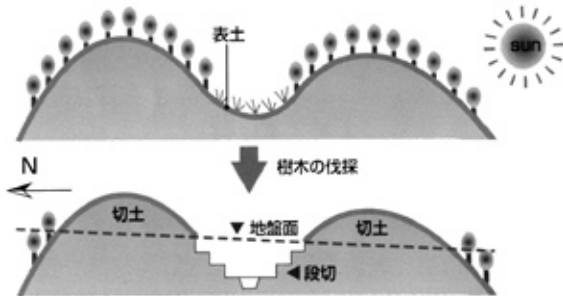
造成後の「自然復元」

では、こうした大規模な造成工事による「自然破壊」から、いかにして自然環境を復元し、保全していくか——この大きな課題を解決するためには一体どのような手がうたれたのでしょうか。

開発区域内の植物も「一部は伐らずに保存し、本来の緑の環境の維持」が図られ、「豊かな栄養分が含まれている表土（地表にある腐葉土）は、宅盤の整備後に公園予定地などに運び入れ、植栽の成育に

活用」されました（図面）。

桂坂では、「表土」の活用とともに「植樹する木の大きさや樹種に適した土質の改良にも力を入れ」た、細部にわたる配慮と工事が功を奏して、今や緑豊かな住環境が形成されました。



写真Aは1980年代後半、Bは2000年の、Cは2009年の、いずれも天蓋の花公園を、同じところから撮影した写真です。樹木の生い茂る有様は遅く見事という外ありません。

Aでは、植樹されたのは若い木のように、根づきを良くし風雪にも耐えられるように添木で固定されており。Cは20年を経た後の写真で、生い茂る樹木で公園の様相もすっかり様変わりし、「表土」移植と土質改良の効果が現れたものといえます。



Dは、同じ天蓋の花公園の西の入口から北を望んだ写真です。藤棚の先に見える山は松尾山、しかし手前から山裾まではまだ住宅は見え、建設以前の姿です。ところが2009年の写真Eを見ると、生長した藤棚が視界を遮り、一人前に緑蔭をつくっています。「緑豊かな桂坂」というべきでしょうか。



人工による桂坂の「自然」

こうして、マスタープラン作成から造成工事に至るまでをたどってみると、「桂坂の開発には、多くの人びとの意見と知恵、最新の技術が盛り込まれ」住環境として整備されているわけです。しかし、桂坂が「人工」の造成地である以上、住民としては、例えば地震などの災害に備える上で「造成工事のあらまし」は知っておかねばなりませんし、また、植村善博氏の次のようなことばも肝に銘じておく必要があります。

小畑川の上流域には丘陵や台地が広く発達する。右岸の大原野台地、左岸の塚原丘陵がその典型で、これを開析する谷は比高10m～50m程度の谷を刻み込み、平地で低温な谷底低地が展開していた。

洛西ニュータウンの開発で千丈川や野田川、北川の谷地形を周囲の大阪層群を削平した土砂で埋立て平坦化した。このため、旧谷部分では5～15mに達する軟弱な埋立地盤が見られ、振動の増幅とともに液状化による被害が心配される。

一方、桂坂団地では主に大阪層群からなる丘陵を削り、谷部には厚さ10m～40mにも達する厚い盛土工事が実施されている。大規模な地形改変のため原形地形はほとんど消滅し、平坦地となっている。

谷埋め盛土部は、年月が経過すれば住宅の耐震性が劣化し、地震災害の危険性が増大してくると懸念される。

植村善博『京都の地震環境』（ナカニシヤ出版 1999.3.30刊）

「桂坂」を心の中の「歌枕」に

ところで私たちの住む「桂坂」は、「桂」の坂。桂坂口から大枝交番までの、中央本通り両側の街路樹は「桂」の木です（国道9号線・沓掛口から桂坂への進入路にも当初「桂」が植栽されました。しかし一部が枯れて、今はイチョウの木が補植された混植の並木道です）

「桂」の木は、中国の伝説の中では「月の中に生えている」といわれているもの。『古今集』巻4・秋の部に、壬生忠岑の次の歌が見えます。

久方の月の桂も秋はなほ
もみぢすればや照りまさるらむ

「月に生うる桂の木も秋にはやはり紅葉するので月も一層、明るく照るのであろう」の意で、理智の勝った歌。冴えわたる秋の月影を見るにつけ、どうしてこうも清かな光を放つのだらう、おそらくそれは…、と思いつつ、月に生うる桂の木の、折しもの紅葉を詠む、まことに美しい、しかもスケール大きく、天空に想いを寄せての歌です。

そこで、この「桂」の美しいイメージをとまなう「桂坂」を、私たちの中に生きる「歌枕」として定着させて行くことはできないでしょうか。いい換えれば、「桂坂」という地名が、ここに住む私たちの心の中で「歌枕」的に作用し、緑豊かな、美しい心

象風景をくっきりと描き出す、そして、まちづくりの方向なり日常の活動なりに裨益してくれることになれば、ということです。

そのためには、この「桂坂」ということばに、開発時に「多くの人びとの意見と知恵、最新の技術が盛り込まれ」と同じように、私たちもまた人智を集め、それぞれが額に汗して樹木に培いながら、自然環境の維持と心とむコミュニティの形成のために地道な努力を重ねて行き、そしてまた、次世代に残すべき生活空間としての豊かな内容、常に心の回帰する拠り所「原風景」ともなりうるような内容を色々な角度・立場から付与していく必要があります。

様々な社会的要因が複雑に絡み合い、かつて家族や地域社会に見られた協和・共同よりもむしろ個々の在り様を重視する方向へと社会が変貌し、そのため各処で齟齬を来している状況下にあるだけに、この「桂坂」という地名に、私たちの手でしっかりした内容を与えて「歌枕」のごとく機能させることの必要性を痛感いたします。

（関連⇒「コミュニティとしての桂坂」38頁、
「新たな〈ふるさと〉桂坂」68頁）

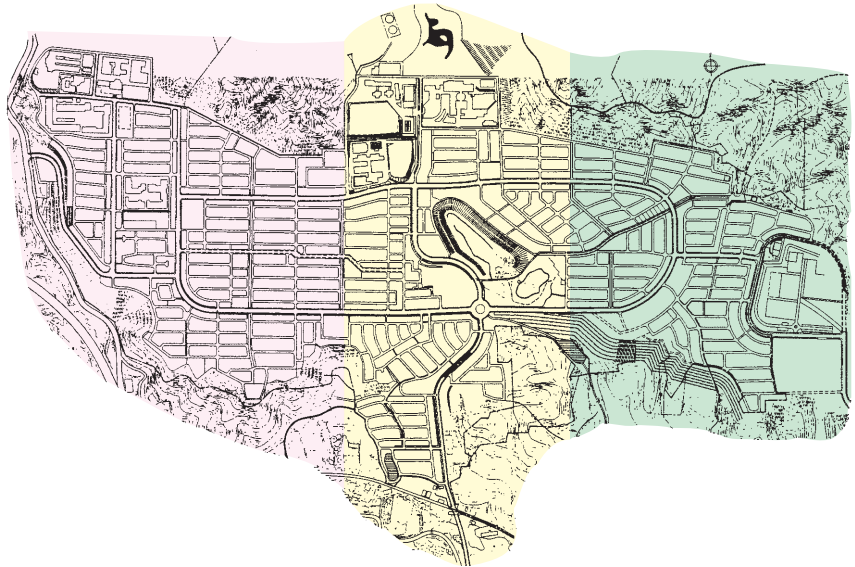
次頁よりの数頁は、桂坂の地図と写真などで「誌上散策」を楽しみ、心の中で「桂坂の歌」を口ずさみながら桂坂の「来し方・行く末」を考えていただくとの趣向のもとに作成した資料です。



- ①西尾川
- ②淳和天皇御母陵
- ③下狩川
- ④大枝小
- ⑤小畑川
- ⑥国道9号線
- ⑦洛西ニュータウン
- ⑧国道沓掛口
- ⑨桂坂口
- ⑩大江の関跡
- ⑪光仁天皇皇后（高野新笠）陵
- ⑫天蓋の花公園
- ⑬かりん公園
- ⑭ふれあいの里
- ⑮山の辺の公園
- ⑯桂坂小
- ⑰大枝中
- ⑱野鳥遊園
- ⑲日文研
- ⑳古墳の森
- ㉑桂坂公園
- ㉒ロータリー
- ㉓沈砂池
- ㉔唐櫃越
- ㉕松尾山
- ㉖峯ヶ堂跡
- ㉗御陵公園
- ㉘京大桂キャンパス

桂坂の散策

桂坂を便宜上、西・中央・東の三つに分けて、公園や緑道の紹介と散策コースの一例を記しました。四季折々、表情豊かな桂坂の自然を楽しまれてはいかがでしょうか。



散策コースA

- ①ふれあい広場 —— ⑤山の辺の公園 —— ⑥モミジ坂緑道 ——
⑦香りの花公園 —— ⑧石畳の道 —— ⑨天蓋の花公園



①ふれあい広場

この広場は「ふれあいの里」のバス停の北側にあります。春は、バス通りに面した桜の並木が美しく、その上の「ふれあい広場」にはグラウンドゴルフなどのできるグラウンドや円形劇場風の野外ステージがあります。その近くに数個のベルからなる、時を知らせる鐘「カリオン」があります。その上には、桂坂の土地に棲息し南の空に向かって羽いっばいに風を受け今にも飛び立ちそうなキジの造形物が載っています。心安らかなひと時を演出してくれる風や鐘の音によって、殺伐とした現在の暮らしの中で、人間性豊かな生活を取り戻そうという願いのもとに制作されたものようです。他にもいくつかのオブジェがあります。ふれあい祭りの会場となるこの広場内は、車椅子で回ることができます。♿

②ふれあいの里

福祉関係の施設。「ふれあい広場」に立ち、向かって東から療護園、更生園、授産園の各施設。3階の建物はふれあい会館（宿泊可能）、中にレストラン『ベルデ』や健康増進室の施設などがあります。会館の裏、南西方角に特別養護老人ホーム「杏掛寮」、西に西総合支援学校があります。

③あかしあ公園

鉄棒、ブランコ、滑り台、砂場があり、公園北側には高いフェンスに囲まれた球技の可能なグラウンドがあります。



④しらかば公園

近隣のコミュニティの場です。 


⑤山の辺の公園

モミジ坂緑道の北の山裾にあります。園内には東屋や「まちづくり委員」で桂坂在住の彫刻家・小清水漸氏作のイタリア産の大理石を使用した舟形の造形物やモダンな灯籠があります。



⑦香りの花園

円形劇場風の公園を取り巻くように藤棚の回廊があり、夏は程好い緑蔭をつくってくれます。ただここには、屋根のある休憩所がなく、雨を避けることはできません。

公園の北側を東西に横切る「石畳の道」は道幅も広く、東に行けばプラザパーク、桂坂センター街へと続きます。そのところどころにも休憩用のベンチとして大きな切り石が置いてあります。 



⑧石畳の道

別に「ファッションストリート」の名があり、落ち着いた感じのする道。「まちづくり」当初の計画では、この両側には店舗付き住宅が立ち並ぶはずでした。道幅は広く車も通行でき、並木にエゴノキが植栽されています。石畳に敷かれているのは中国産の御影石で、「香りの花園」の辺りには、かつてパリのルーブル美術館前の広場を埋め、フランス革命の遠い歴史を知る石もはるばる海を渡ってこの桂坂に到来、舗装に用いられているそうです。



⑨天蓋の花公園

「天蓋の花公園」は、「サンクンガーデン」風に全体を1間ばかり掘り下げてあります。石は、島根県産の来待石（きまちいし）で、年を経るとともに色合いを深めるといわれています。また、この公園は住宅街のはずれにあるために、大人の間では死角がいくつかあって、人目につかず危ないのではないかとと思われるかもしれませんが、子どもたちにとっては元気に遊びまわることのできる、面白い遊び場のようなようです。



⑥モミジ坂緑道

「山の辺の公園」から南端の「天蓋の花公園」までの緑道をいいます。舗道には自然石などが敷き詰められ、木蔭にはところどころ大きな切り石製のベンチも置かれています。



散策コースB

- ①春のプラザ・秋のプラザ —— ②かりん公園 —— ③プラザパーク ——
④桂坂野鳥遊園 —— ⑤日文研「赤おに」

①春のプラザ・秋のプラザ

「桂坂口」のバス停から北に進み、交番から一区画先で西に曲がり少し行くと、「東海自然歩道」（京都市緑地管理課）の案内板があります。

「かえで」地区は桂坂で最初に販売された地域だけに、開発業者が最も力を入れて「まちづくり」を行った地域です。その頃の宣伝用の案内ピラにはこの辺りの風景が用いられ、大いに耳目を惹くことになりました。もともと北の山裾から流れていた小川が、桂坂の開発に際して贅沢な造りの川に模様替えし、起伏を生かした川のほとりに、落葉、常緑織り混ぜた樹木、桜やモミジの木が植栽され、人工造成のものが今ではもう「桂坂の自然」を代表する風景の一つに数えられるようになりました。

1間幅ぐらいの小川に名付けられた「春のプラザ」には桜、「秋のプラザ」にはモミジがそれぞれ主木として植えられていて、桜の頃、若葉、紅葉の頃は特に趣があり、撮影の場所としても面白いところです。「秋のプラザ」の景観は第4回京都市美観風致賞を受賞しています。ただ、「東海自然歩道」の一部ながら雑草蕪雑のこの水辺の様は、果たして「豊かな自然」のあらわれとみなすべきなのかどうでしょうか。

この川は、同じ人工のものでもバス通りに見られるコンクリート造りの川とは異なり「贅沢な造り」で、護岸、川床ともにアカミカゲ石の石組（桂坂中央通りのロータリーから野鳥遊園に至る川も似たような石組）です。しかし残念ながら水量乏しく、水棲生物、魚などの姿はありません。



②かりん公園

造られた当初の仮の名は「冒険公園」で、桂坂で最初にできた児童公園です。周りにはカリンの木が多く植えられており、秋深くなると鮮やかな黄色い実がたわわになります。このようなことから「カリン公園」の名が付いたのでしょうか。傾斜地にあり、子どもたちが遊びに夢中になるところです。ナラやクヌギの木も植えられており、クリスマスリースの材料に使える木の実集めには格好の場所です。

公園の西側に少し長い石段があり、「東海自然歩道」を上りつめたところで右折、この「木洩れ日の緑道」を進むと、「中信」桂坂支店の前に出ることができます。♿️♿️



③プラザパーク

御影石が段状に敷かれており、金属の変わった円形のモニュメントが目を惹きます。公園の東南の隅には、遊具のある、子どもの遊ぶコーナーも作られています。



公園について、桂坂保育所の方が次のような一文を広報『桂坂』に寄稿されています。

お散歩公園だいすき 桂坂保育所

子どもたちはお散歩や公園で遊ぶのが大好きです。四季の表情豊かな遊歩道を通り、目的の公園を目指して歩きます。車を気にせず歩けることは大変恵まれた環境です。そのせいか、道すがら目ざとくいろいろな発見をしているものですから、それはそれは賑やかです。いざ、目的地に到着すると、心と体を更に弾ませて思いきり楽しそうに遊びます。

かくれんぼや鬼ごっこができる公園、想像力をめぐらして「つもり遊び」ができる公園、保育所にはない遊具がある公園、自然観察ができる野鳥遊園、自然と向き合い遊べる山歩き——年齢や目的に合わせて行き先は変わりますが、豊かな心の成長と体力づくりには欠かせない、大切な保育の環境です。

また、道で出会う地域の方とのささやかなふれあいも子どもたちの社会性をのばすためにはありがたい経験となります。子どもたちに大好きなお散歩先を聞いてみました。かりん、天蓋の花、山の辺、桂坂、きさらぎ…と全部の公園が挙げられました。のんびり憩える公園や活動的に遊べる公園といった理由では、乳児や幼児でそれぞれ意見が分かれますが、子どもたちは平面的で遊びが限定されてしまうところはあまり好みません。

人工的に整備されていても、自然が活かされていたり、その空間や造りの中でイマジネーションを働かせて遊ぶことが大好きなのです。自由に遊びながら、ルールやマナーを覚え、身の安全をはかる術を獲得していきます。そのような意味でもそれぞれに特徴を備えた公園がある桂坂は本当に素晴らしいと思います。


天気の良い日には、「ってきます！」の小さい行列がつづき、帰り道の「ただいま！」の声は些かお疲れ気味？ けれども、小さな手には木の実や雑草のお土産を握りしめ、瞳は輝いています。地域の中で見守られ育つ子どもは幸せだと感じる瞬間です。

これからも、地域の皆様に感謝しつつ、お散歩道や公園を汚さないで大切に遊ばせていただきたいと思います。公園で出会ったら、一緒に遊びましょう！

(広報「桂坂」124号より)

④桂坂野鳥遊園

社会福祉協議会の施設。「観鳥楼」には双眼鏡が設置されており覗いてみると、山の木々や池の辺りに鴨や鴛、カワセミなどの姿が見られます。時には、サルの一団の散歩姿にも出会います。

園内の外周は散策路になっており、また、西側には毎年「ホテル鑑賞会」の行われる、せせらぎのある広場もあります。(P.47参照) 



⑤日文研「赤おに」

「桂坂野鳥遊園」正門の少し南に、「国際日本文化研究センター」のレストラン「赤おに」につながる入り口があります。一般の人でも利用できます。



散策コースC

- I ②桂坂公園 —— ④サクラ坂緑道 —— ⑤きさらぎ公園 —— ⑦山の里公園 ——
⑨細谷公園 —— ⑩御陵公園 —— ⑪京都大学桂キャンパスの施設
- II ⑥花の舞公園 —— ③さわらびの緑道 —— ⑤きさらぎ公園 ——
⑧峰ヶ堂第2児童公園 —— ⑩御陵公園 —— ⑪京都大学桂キャンパスの施設

①古墳の森

桂坂は切土、盛土で造成されていますが、この「古墳の森」はそのまま凹地として残され公園として整備されました。かつては植栽され、中には遊歩道もありました。

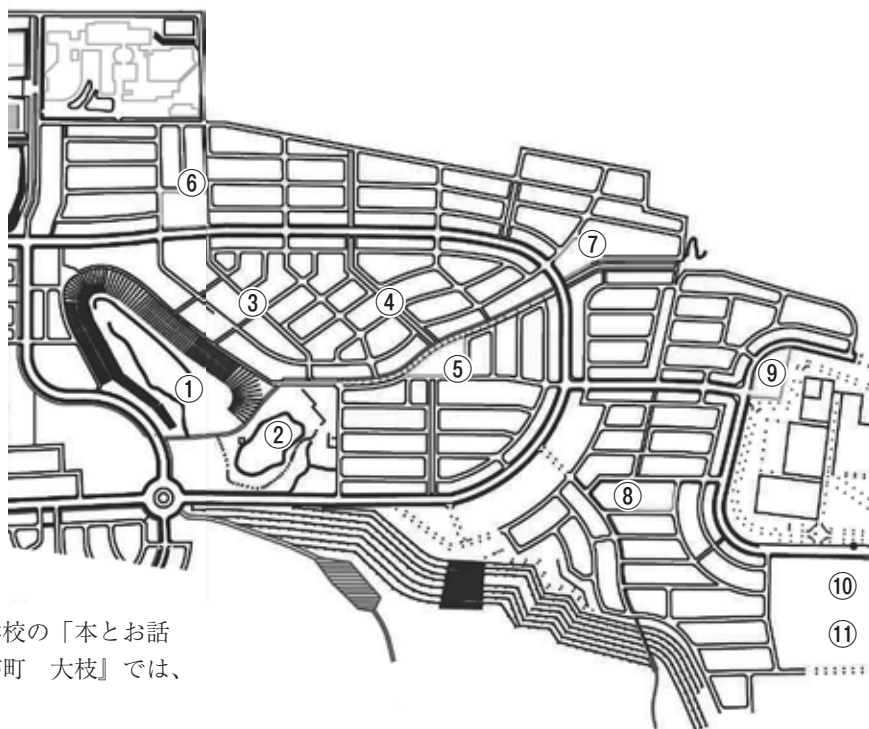
1988年9月にはこの公園で「宗次郎コンサート in 桂坂」も開催されましたが、残念ながら今は危険一杯の場所とみなされ、「まむしに注意」の看板も立ち、立入禁止となっています。

北側の遊歩道には約100本の桜並木があり、桜の頃は散策にもってこいの場所です。展望台も設けられています。

大枝山古墳群について、桂坂小学校の「本とお話のクラブ」作成の『歴史探訪 我が町 大枝』では、

「大枝塚原町の北1.5kmの谷間に大枝山古墳群があり、23基の古墳がまとまって分布している。このうち13基は古墳公園として保存されている。その中でも22号墳は、直径20mの円墳で大枝山古墳群の代表としてあげられる。古墳時代には、この地域では、大型の首長の墓から古墳墓に至るまで数多く古墳がつくられた。それはこの時代には、洛西・大枝地区の丘陵や山間部がお墓として利用されたことを示している。『塚原』の名前もそれに由来している」

と説明されています。



②桂坂公園

約6,000坪の原っぱをイメージして造られた「都市公園」です。芝生の広場があって存分に走り回れるので、時々子どもさんを遊ばせるお母さんの姿も見受けられます。保育所の子どもたちにとっては楽しい遊園地です。東側には池もあって真鯉の泳ぐ姿を見ることができます。しかし、池の周囲はすっかり「整備」されすぎて、水の浄化作用に役立つ水辺の植物は寂しそうです。西側に洋風の亭（チン）があり南西方面を望むことができます。水道施設があり、スケッチやピクニックを楽しむことができます。



③さわらびの緑道

桂坂公園から花の舞公園の横を通り、北の山裾まで続いています。『源氏物語』の登場人物を連想する桐、柏など、他に30種を超える草木が植えられています。

④サクラ坂緑道

峰ヶ堂町3丁目のバス停あたりから、きさらぎ公園を通り、北の山裾のところまで続いています。緑道は白と黒の幾何学模様で舗装され、春には連翹、馬酔木、木蓮、桜などの花が咲き誇ります。



⑤きさらぎ公園

北側を「東海自然歩道」が通っています。起伏のある雛段式の公園に背丈の低い紅梅・白梅が梅林を作り、馥郁たる香りを放ちます。春には梅のほかに桜、その他の花が一斉に咲きます。



⑥花の舞公園

回廊があり、四季折々の花が楽しめます。階段が多くあり、小さい子どもたちにとっては興味深いことでしょう。



⑦山の里公園

約1,600m²の広さの中には、高低差約5m、全長8mの滑り台があり、子どもさんにはスリル満点の遊具です。

⑧峰ヶ堂第2児童公園

遊具がたくさんあり、近隣の子どもの遊び場です。

⑨細谷公園

桂坂の一番東に位置し、ここからは京都市街地が一望できます。子どもたちが走り回ることのできるスペースと遊具があります。

すぐ隣に位置する京都大学のCクラスター沿いにあるヒルトッププロムナード（遊歩道）を進んでいくと、時計台のあるBクラスターへと続きます。(P.110参照)

⑩御陵公園

この公園は京都大学Bクラスターの時計台のすぐそばにあります。ゆったりとした園内には東屋が二つあります。中央の広場は芝生に覆われ、その一角には色鮮やかな遊具があります。丘や小道があり、ピクニックには最適でしょう。♿



⑪京都大学内の施設

京都大学桂キャンパスの敷地内には、カフェ「アルテ」、カフェテリア食堂「セレネ」、ベーカリーショップ「リユージュ」、カフェ「ハーフムーンガーデン」、フレンチレストラン「ラ・コリーヌ」など、一般の人が利用できる施設があります。

桂坂は「石」の庭

桂坂で見かける「石」に注目してみましょう。住宅の石垣はそれぞれ趣の違った石積みが施されています。また、公園には、さりげなく「石」の造形物が配置され、緑道にも自然石が敷き詰められ、石のベンチのあるところもあります。

住宅の「石垣」



穴太石積



乱れ積



小端積



崩れ石積



野面石積

緑道の「敷石」



サクラ坂緑道



モミジ坂緑道

「石」の造形物



山の辺の公園



日文研前の緑道



東海自然歩道のつくばい



ふれあい広場

「石」のベンチ

